

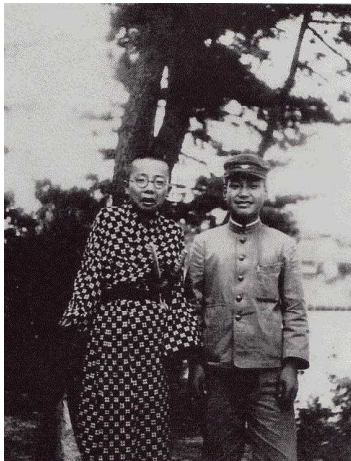
# 「知恵ある者となるために」

(1 コリ3:18-23)

## 挽地茂男

2019.3.3 日本基督教団千歳丘教会

遠藤周作の母親が（兵庫県西宮市にある）夙川のカトリック教会で信仰を求め（求道を）始めたとき、当時10歳だった周作少年は、十字架のキリストの前にひざまずく母親を見て「おかあちゃん、なんでこんな

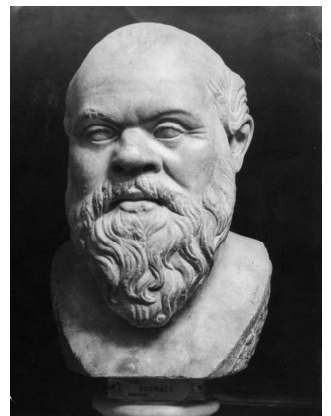


弱いおっちゃんのこと拜んではるんやろ」と思ったと回顧録で書いています。少年遠藤周作は当時、嵐寛寿郎（鞍馬天狗）の

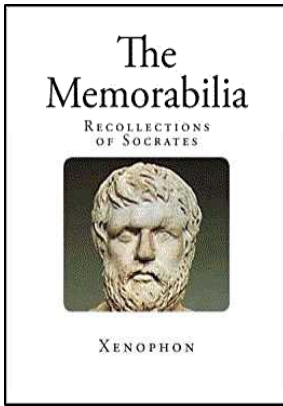
大ファンで、ファンレターを書いて弟子入りを申し込んだぐらいのファンだったそうです。つまり周作少年にとって人を救ってくれるのは、鞍馬天狗のように強い者であって、強い者が弱い者を助ける（救う）というのが当然だったのです。十字架で死んでいくキリストは、どうしても人を救う存在には見えなかったのです。周作少年は自分に対して正直な少年だったのです。信仰とは遮二無二何かを盲信することは違う側面があります。信仰とは、信じること

のできない自分をも含めて、自分を開いていくことなのです。しかしこの遠藤周作が、やがて生涯を通してキリストの十字架の意味を理解し、作品化していくことになるのです。

ただいま読みました箇所の出だしに、「だれも自分を欺いてはなりません。・・・」(3:18)と自己検討（点検）の勧めがでてまいります。「わたしは自分を欺いてはいないか。」パウロはガラテヤの信徒への手紙6章3節でこう書いています。「**実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思**う人がいるなら、その人は**自分自身を欺**いています。」またパウロは、そのように述べる時に、「**思い違いをしてはいけない**」(1 コリ6:9, 15:33, ガラ6:7)という言葉が頻繁に加えています。それはこのような問題が、つまり自分について間違った考えを持つということが、起こりやすい問題だからです。人は誤った自己認識や自己観で生きていることが多いのです。



ソクラテスは、「汝自身を知れ」

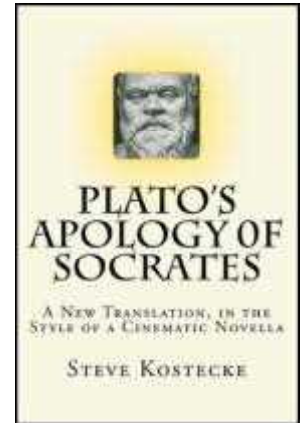


と教えたと言われて  
ています。クセノ  
フォンというソ  
クラテスの弟子が  
書いた『ソクラテ  
スの思い出』とい  
う本があります。

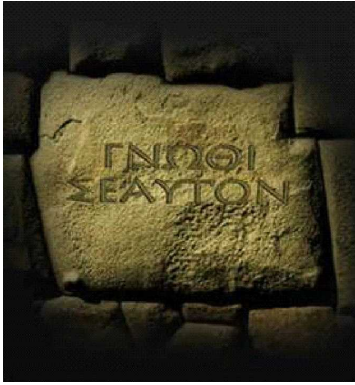
その本のソクラテスと弟子の問答  
の中(4.2.24-30)に、「自分さえわ  
からない者が、他のことなど判る  
はずがない」というソクラテスの  
言葉が出てまいります。自分自身  
を知ることが、人間にとってきわ  
めて重要なテーマであることが分  
かります。

しかし今は、それはさておき、  
ソクラテス自身のことにも触れたい  
と思います。このソクラテスとい  
う人物は面白い人物でありまし  
て、神の声を聞く哲学者だったと  
言われております。弟子のプラト  
ンが書きました書物の中にも、あ  
る人がソクラテスを宴席に招いた  
のですが、なかなかやって来ない。  
そこで招いた主人は召使に様子  
を見に行かせますと、はたしてソク  
ラテスはもう長い時間街角にたた  
ずんで動こうとしない。神の声に  
耳を傾けていたというのです。こ  
のソクラテスが、イエス・キリス

トと同じように、いわばでっち上  
げの裁判によって裁かれて最期を  
遂げたという話は有名ですが、そ  
の裁判でのソクラテス自身の弁論  
が『ソクラテスの弁明』という本  
に出てまいります。当時のアテネ  
では、ソクラテスがアテネの人々の  
心、特に青年たちの心を捉えて、次  
々に青年たちがソクラテスに追従して  
いく。アテネ当局は、このまま放置  
すると、アテネがソクラテス一人  
によって転覆させられてしまうか  
もしれないと統治上の危惧を抱き  
ます。その当局が、裁判を仕組  
んだといわれています。そのソク  
ラテスの裁判は陪審員制で行われ  
たのですが、僅差でソクラテスは  
敗訴します〔推定全票数 500/501  
→ 280 vs 220/21〕。

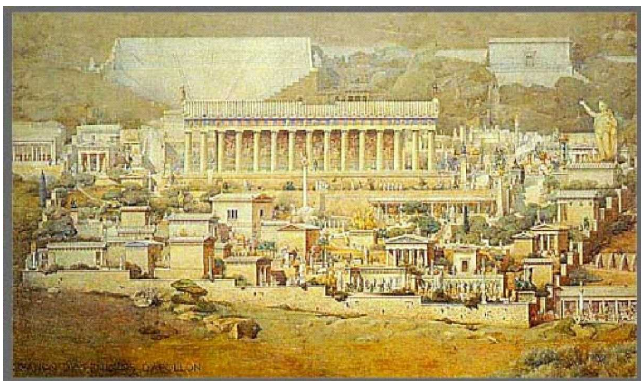


その裁判で原告側から、ソクラ  
テスが自分を「世界一の知者」(ソ  
クラテス以上の知者なし)を標榜  
して若者たちを惑わした、という  
告発がなされます。これに答えて  
ソクラテスが事の真相を明らかに  
すべく、弁明をいたします。真相



「汝自身を知れ」(デルフォイ神殿)

は、わたし自身つまりソクラテスが「世界の知者」などと言ったのではないというのです。それはソクラテスの友人カレイポンという男が、デルフォイ神殿にまいりました。この神殿は当時有名な神託所—つまり神の託宣、神託をうかがえる神殿として有名—でした(ちなみにこの神殿の入り口に「汝自身を知れ」という銘があったのです)。例えば、為政者はこの戦争に参戦すべきかどうか、商人はこの商売に打って出るべきかどうか、この長旅に出かけるについては安全かどうかなど、人々はこの神殿で神託を求めたというのです。はたして、この神殿に行った友人のカレイポンが「この世で一番の知者はだれか、



デルフォイ神殿(複合施設群)

ソクラテス以上の知者はいるかと」おうかがいを立てたというのです。はたして神官を通して与えられる神託を待っておりますと、「この世にソクラテス以上の知者はいない」という神託が下ったのだというのです。カレイポンは急いでソクラテスにその旨を告げます。「ソクちゃん、ソクちゃん、君が一番だって、デルフォイの神様が言ったんだとさ。」それを聞きますとソクラテスは、「万歳、ボクちゃんが一番」と言った。のではなくて、自分が世界一の知者でないことくらい自分が一番知っている、これは何かの謎だ、神の謎かけだ、「**いったい神は何を言おうとしておられるのだろうか**」(プラトン『ソクラテスの弁明』21B)と申します。

ソクラテスは、自分が世界一の知者でないことなど、当代の知者たちを訪問すれば一目瞭然、すぐにでも分かるとして、この神の謎を解くために、世の中の知者と呼ばれている人々の歴訪を開始します。まずソクラテスは(1)政治家のもとにまいります。わたしたちの感覚では、特に日本の実情〔私利私欲のために、政治や利権を利

用する胡散臭い人たち}からすると、政治家は知者であるなどとは考えにくいのですが、当時のギリシアの政治家は知者でなければならなかったし〔しかも彼らは無給です〕、民衆を動かす実際的な知恵を持っている者でなければならなかったのです。政治家のもとを訪れて、なるほど彼が知者であることを知りますが、同時に、ソクラテスは失望してしまいます。

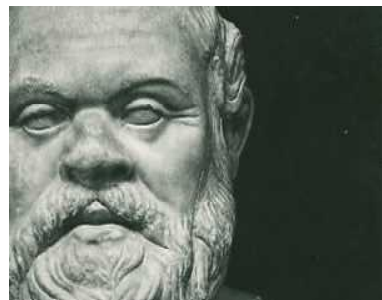
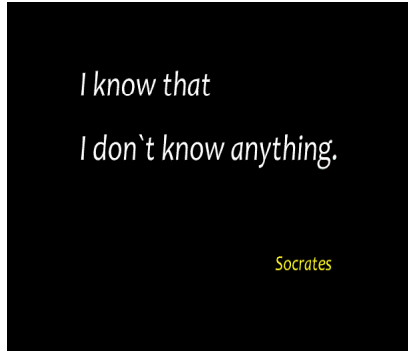
そして次にソクラテスは(2)芸術家(ποιητής 詩人／作家)のもとを訪問いたします。作品を創作するために、ふつうの人間が持てないような、インスピレーションにあふれた天来の知恵の持ち主である芸術家のもとを訪れて、なるほど彼が特別な知者であることは分かるのですが、やはりがっかりしてしまいます。

次いでソクラテスは、(3)手工業者のもとにまいります。やはり特殊な知恵ではなくして、こつこつと日常を堅実に手ずから作り上げている人こそ真の知者に違いないと考えて手工業者を訪問いたしますが、やはり同じように失望してしまいます。

これらの知者の訪問が失望に終

わったのは、彼らが知者でなかったからではありません。知者と言われる人々は、なるほど彼らの専門領域においては、ソクラテスの及ばない知恵の持ち主であることは確かなのです。それぞれの領域については、ソクラテスが哲学者として知者であることと、彼らがそれぞれの領域において知者であることには大差がありません。し

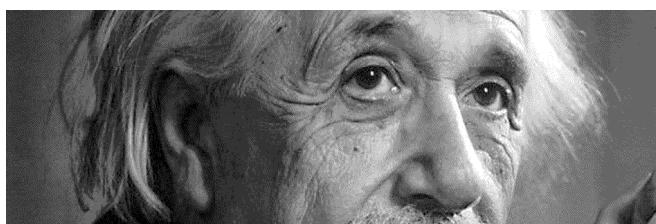
かし彼らとわたしソクラテスを比較すると、一つだけわたしの方が知識が多い。わたしは自分の専門の領域を越えた途端、自分が何も知らないということを知っている。自分が無知だということを知っている。わたしにはこの「自分が無知だ」という知識が彼らより一つだけ多い。政治家も、芸術家も、手工業者も、彼らが自分たちがある領域において知恵を持っているがゆえに、あらゆる事を知っているかのような、自分について



の「**まちがった認識**」いわば知的幻想（知的全能感といったような幻想）に陥っていると言い出します。『ソクラテスの弁明』のソクラテスは次のように語ります。

「**諸君、神だけが本当の知者なのかもしれない。そして人間の知恵というようなものは、何かもうまるで価値のないものだということを、かの神託の中で、神は言おうとしているのかも知れません**」

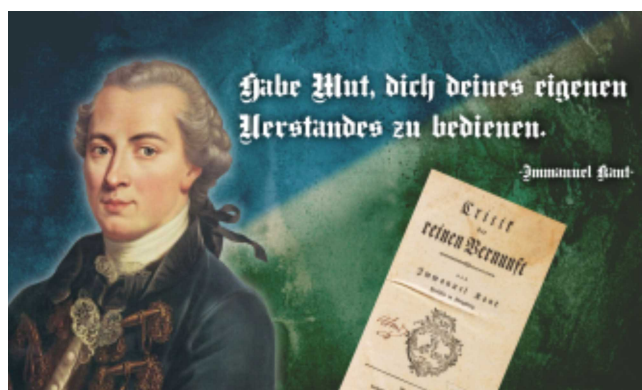
（プラトン『ソクラテスの弁明』23A）  
世界一の知者などと言われるソクラテスが、知者なのはこれくらいのもなののだ。たかだか自分の無知を知っているくらいのもなののだ。およそ人間の知恵などというものは、その程度のもなののだということです。有名なソクラテスの「無知の知」であります。



学問的に優れた業績を残した人たちは、必ず自分の無知を自覚しております。しかもそれを、かなり率直に口に致します。例えばアインシュタインは「学べば学ぶほど、自分がどれだけ無知であるか

思い知らされる。自分の無知に気づけば気づくほど、より一層学びたくなる」(www.facebook/thaimeisou)と語ります。

カントという哲学者がおりますが、彼の著作に『純粋理性批判』という書物があります。この著作でカントが何をやっているかと言いますと、まず神が存在するという「神存在の証明」を否定するのです。〔神の存在を肯定する論証をするのではなく、それらを吟味してほぼ否定してしまいます。〕ヨーロッパのキリスト教世界は自分たちの社会的な基盤となる神信仰に確実性を持たせるために、神の存在を証明する多くの議論を提示してまいりました。しかしカントはそれらの神の存在証明を次から次へと否定してまいります。しかし彼は無神論を主張しているのではないのです。彼はこの否定を通して、理性によって神を証明す



るといふことの不可能性を主張しているのです。つまり理性の限界性を明らかにしているのです。理性によって神がいるとか、いないとか言うことは理性の越権行為だといふのです。そして理性の限界性が示されたとき、今度は逆に信仰の領域が確保されてくるのです。理性がとやかく言つてはならない領域があるのです。

パスカル〔気圧を意味する「ヘクトパスカル」といふ用語は、「圧力」の研究をしていた彼の名前から取られた〕も、科学者であり哲学者であります。『パンセ』といふ本の中で、こ



う語ります。  
「**理性の最後の一步は、理性を超える事物が無限にあるといふことを認めることである。それを認めるところまで到りえないならば、理性は弱いものでしかない。**」(『パンセ』188)

さて、今日の聖書箇所に戻りますと、「**だれも自分を欺いてはなりません。**」(3:18a)と語つたパウロは、続けてこう言います。「**もし、あなたがたのだれかが、自分**

**はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです**」(3:18b-19a)。「**愚かになれ**」といふ言葉は、「**謙虚になれ**」といふ戒めと理解することも出来ます。しかし「**謙虚になれ**」といふ戒め以上の意味を持っています。

それはこの聖書の箇所が、キリストの十字架に表された救いを、つまりこの世の知恵ある人々から見れば「**愚かなもの**」と見える十字架の救いを、神の知恵として語る文脈だからです。救いといふ神の知恵については、①「この世の知者」(〔新共同訳〕**この世で知恵のある者**)をそのまま向上させ育てていけば「**神の知恵**」に到達するといふような連続性、同質性がないのです。また②「**知者になるために愚かになる**」(〔新共同訳〕**知恵ある者となるために愚かな者になりなさい**)といふことは、別のものを満たすために今あるものを空にする必要がある程の異質性があるといふことです。なぜなら救いといふことに関して、「**この世の知恵は、神の前では愚かなも**

のだからです」(19a)

神の前で、救いということに限って言えば、現代の知恵も「愚かなものだ」ということなのです。パウロはこのコリントの信徒への手紙一の1章21節でこういいます。「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」

宣教とは「愚かな手段」なのです。この愚かな宣教の言葉を受け入れるとき、わたしたちは「愚かな者」となるのです。しかしその愚かな者こそ、神の御前に知恵ある者なのです。神の知恵を持っているからです。「神があなたを愛しています。」愚かに聞こえます。しかしこれが神の知恵なのです。「主イエスはあなたの罪のために十字架で死なれました。」愚かな宗教的戯言たわごとに聞こえます。しかしこれが神の知恵なのです。「あなたを創られた父なる神が、キリストの十字架を通してあなたを招いておられます。」本当だとは思えません。しかしこれが神の知恵なのです。パウロはこう語ります。ロー

マの信徒への手紙5章8節。

ロマ5:8 しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。

これがパウロの確信でした。ポイントは2つです。第1に「キリストがわたしたちの罪のために死なれた」ということ。第2に「キリストの十字架は神の愛の告白だ」ということです。そして復活とは、この世の知者たちが「愚かな」ものとして葬り去ったキリストの生涯とその言葉を、「神の知恵」として逆転するのです。この確信がパウロを動かしたのです。

この宣教のメッセージを「わたしにとって大切なことは、きっとあなたにも大切なこと」として伝えていくのが宣教なのです。「わたしにとって大切な方(キリスト)は、きっとあなたにも大切な方。」そのよう



な心をもってなされるのが宣教なのです。何か知的な戦略によって、大仰な宣教キャンペーンを張って、最大効率の成果(信者獲得)を目指すこととは違うのです。そしてその「大切なこと」も「大切な方」も神様が与えて下さったのです。

神様がすべての祝福の源なのです。だからパウロはこう言うのです。21-23節。

3:21 ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。3:22 パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起きていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、3:23 あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。

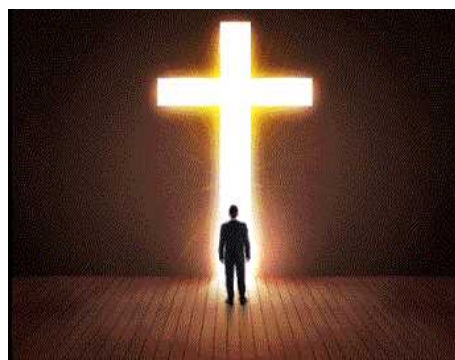
「人間を誇るな」とパウロは言います。「ですから、だれも人間を誇ってはなりません」(v. 21a)。

「誇る」(v. 21) ということは、あるものを祝福の源、祝福をいただく媒介と見なすことを意味します。キリスト者(わたしたち)は、父なる神さまを祝福の源とし、主イエス・キリストを祝福の媒介と考えます。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛さ

れた。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)。救いの恵みは、父なる神の愛を出発点として、イエス・キリストの生涯とその御業を媒介として(通して)わたしたちのものとなりました。

ところで人が「誇り」に思うという場合、誇りに思う対象は優れたもの、立派なものであるのがふつうです。しかしパウロは神さまや主イエスを誇るだけでなく、「自分の弱さを誇る」(IIコリ12:9)と言います。つまり、自分が弱いことによってキリストの恵みと力が自分に宿ると考えているのです。「自分の弱さ」もまた祝福の源になると言うのです。またパウロは「十字架を誇る」(ガラ6:14)

とも言います。キリストの生涯に見られる英雄的な奇



跡行為だけではないのです。キリストの十字架の惨劇がパウロの祝福の源なのです。十字架から自分の罪の赦しも、神さまの愛の呼びかけも、すべての祝福が来ると考



えるのです。

それに対して「人間を誇る」ということは、ある人間との間にある特別な関係や縁故が、祝福の源と考える、ということです。先週も見ましたように、コリントの信徒への手紙一の1章からは、コリントの教会に分裂があったことが分かります。1章12-13節。1:12 あなたがたはめいめい、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケファに」「わたしはキリストに」などと言いつつ、それぞれが自分だけの十字架につけられたのですか。パウロがあなたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によって洗礼を受けたのですか。特定の先生（パウロやアポロやケファ）との縁故関係から、特別の祝福をいただくと、コリントの人々は考え始めていたのです。

しかし「主キリスト・イエスにある神の愛」においてすべてが逆転するのです。22-23節。

3:22 パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、3:23 あなた

がたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。

23節には、実際は「しかし」という言葉が入っています。こうです。「3:23 **【しかし】**あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。」この「**しかし**」は、どの日本語訳聖書にも訳出されていません〔δὲ 口語訳、新改訳は「そして」〕。この「**しかし**」は、わたしたが生きているこの世界とわたしたちの間にある、大切な一線を示しているのです。パウロは「すべては、あなたがたのものです。パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも」と語りました。「一切はわたしたちのものである」と言われたこの世界とそこに起こる事象に対して、突きつけられた大いなる「**しかし**」は、わたしたちのものである世界の基礎と限界を教えてくれるのです。



この世界との境目のこちら側に救いがあるのです。そこには救いを受けた「**愚かな者**」がキリストと共にいます。この世界は、この世の知恵によっては救われないのです。キリストの十字架はこの世の知恵に対して愚かであり弱いものなのです。「**しかし**」自分の愚かさや弱さを認める者、神はそのような人の求めを無にされることはないのです。神は人々を救われます。十字架の愚かさによって、自らの賢さ、知恵を砕かれた人、その人がキリスト者〔原義「キリストのもの」Χριστιανός 使徒11:26〕なのです。そしてキリストのゆえに神のものなのです。

十字架において挫折しているのは、実は「神の子」ではありません。挫折しているのは、「神の子」ではなく「人間」なのです。人間の知恵、キリストを殺すことが知恵だとした(1)人間の知恵が挫折しているのです。神の前にその敬虔さを自負するユダヤ教という(2)人間の宗教が挫折しているのです。ローマ当局と宗教権力が大義として掲げた(3)人間の正義が挫折しているのです。イエスを処理して力で勝ち取れると安易に

考えた(4)人間の平和が挫折しているのです。

十字架の前で、人間の知恵も、人間の宗教も、人間の正義も、人間の平和も挫折するのです。わたしたちは「砕かれたもの」を通してこそ、真の知恵と、真の宗教と、真の正義と、真の平和に到達するのです。「砕かれていないもの」は私たちを支配するのです。(1)砕かれた知恵と、(2)砕かれた宗教と、(3)砕かれた正義と、(4)砕かれた平和が、キリストに示された神の愛に包まれるとき、命ある知恵として、命ある宗教として、命ある正義として、命ある平和として人を生かし始めるのです。



今週も主と共に歩んでまいりましょう。祈りましょう。

2019.3.3 日本基督教団千歳丘教会

3:18 だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだけれか、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。

3:19 この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。「神は、知恵のある者たちを／その悪賢さによって捕らえられる」と書いてあり、

3:20 また、／「主は知っておられる、／知恵のある者たちの論議がむなしいことを」とも書いてあります。

3:21 ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。

3:22 パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、

3:23 あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。

<sup>18</sup> Μηδεις εαυτον εξαπατατω· ει τις δοκει σοφος ει̃ναι εν υμ̃ιν εν τῷ αι̃ωνι του̃τω, μωρος γενε̃σθω, ι̃να γενηται σοφος.

<sup>19</sup> η̃ γαρ σοφια του̃ κο̃σμου του̃του μωρια παρα τῷ θεῷ ε̃στιν. γε̃γραπται γαρ· ο̃ δρασσο̃μενος του̃ς σοφου̃ς εν τῇ πανουργια αυ̃τω̃ν·

<sup>20</sup> και̃ πα̃λιν· κυριος γινω̃σκει του̃ς διαλογισμου̃ς των̃ σοφῶν ο̃τι εισιν ματαιοι.

<sup>21</sup> ω̃στε μηδεις καυχασθω εν ανθρωποις· παντα γαρ υ̃μων ε̃στιν,

<sup>22</sup> ει̃τε Παυλος ει̃τε Απολλῶς ει̃τε Κηφᾶς, ει̃τε κο̃σμος ει̃τε ζωη̃ ει̃τε θανατος, ει̃τε ενε̃στιῶτα ει̃τε με̃λλοντα· παντα υ̃μων,

<sup>23</sup> υ̃μεις δε̃ Χριστου̃, Χριστο̃ς δε̃ θεου̃.